

2011.5

再演

鳥瞰図 —ちょうかんず—

小劇場

作：早船聡

演出：松本祐子

出演：渡辺美佐子／入江雅人／野村佑香／八十田勇一／弘中麻紀／浅野雅博／佐藤銀平／品川徹

企画意図

2008年6月～7月に小劇場3作品連続上演を行った、新国立劇場初登場の若手劇作家とベテラン演出家によるコラボレーション企画「シリーズ・同時代」の中から、渡辺美佐子の主演により好評を博した『鳥瞰図—ちょうかんず—』作：早船聡、演出：松本祐子』を再演。

東京公演後には全国公演も予定しています。

作品

東京湾岸のある町。そこは4分の3が埋め立てた土地で出来ている。かつて住民の多くは海から生活の糧を得ていたが、工業化による汚染と経済成長の中で海に生きる選択肢を捨てた。古い側の土地にある釣り船宿「升本」は3代続く老舗だが、今は地元の常連客相手に細々と営業している。

女将の佐和子と息子の茂雄が切り盛りするこの船宿には近所に住む個性的な面々が集まり、いつも賑やかだ。そんな夏のある日、見知らぬ少女が船宿を訪れた。ミオと名乗るその少女は出て行った長女の娘だと言う。女将にとって初めて見る孫の顔。その来訪をきっかけに失われた海の記憶が語られはじめる……。



2008年公演より

作家からのメッセージ

早船 聡

—再演にあたって

この作品を書くにあたり、私は何度となく千葉県の浦安や行徳を訪れました。『鳥瞰図』は東京湾の奥のある町が舞台なのです。町を歩き、色々な人に声をかけ、昔の様子などを取材しました。「あの向こうは海だったよ」と元漁師の方が教えてくれました。その方は資料館で子供達に昔の漁や海について話すボランティアをしているとのことでした。照れたように、嬉しそうに、自慢げに、そして寂しそうに、昔のことを話してくれました。その老人の指差した先を見ると新しい家々やマンションが並び、人々の暮らしがありました。私はこの町を空から眺めてみたいと思いました。

時間と共に眺めは変化していきます。少しずつ、あるいは大胆に。3年経過した鳥瞰図を再び眺めることができるなんてとても楽しみです。

演出家からのメッセージ

松本 祐子

—『鳥瞰図』再演に寄せて

シリーズ同時代というタイトルを与えられて、この企画はスタートしました。同じ時代を生きる、世代の離れた作家と演出家の出会いを目論まれた企画でしたが、作家の早船氏と私はほぼ同世代で、なんだか面映ゆい気がしたのを覚えています。深夜を越えて朝方まで及んだたくさんの打ち合わせと、渡辺美佐子さんをはじめ様々な世代の魅力的な俳優たちとの共同作業を経て、2008年の6月にこの作品は産声を上げました。

初演のパンフレットにも書きましたが、当時すでに、この日本という国では格差社会とかワーキングプアという閉塞的な社会状況を嘆く言葉が溢れていました。そして、しばらくすると世界的な金融危機が起こり、日本だけでなく、もう世界全体が貧しいような息苦しいほどの閉塞感が街を覆いました。こんな時代に、小さな家族の小さいけど大きい物語を語ることはナイーブかもしれません。例えば、この『鳥瞰図』の世界で生きる人々は、せちがらい社会の片隅で、たくさんの失ってしまった何かを抱えて、ごくごく当たり前で生きています。もちろんどんな人も、社会のありようと無関係ではいられないのですが、社会全体よりも個人の小さな悩み事が人を苦しめたり喜ばせたりするものです。失ってしまった何かを取り戻すということはどういう事なのか、何かを許すということは何なのかという事を描くことで、小さな関係性の修復が、社会全体の関係性の修復性と繋いでいく姿を描きたいと考えています。

個人的な幸せと社会の幸せを、鳥が飛びながら風を感じながら俯瞰して見るように、または、虫が地を這いながらその地面の匂いを感じながら見るように、今の日本の同時代を見たいと考えています。

鳥瞰図

早船 聡

Hayafune Satoshi

2002年、円演劇研究所修了。05年、劇団サスペンデッツを旗揚げ、これまでの全作品の作・演出を手がける。08年、新国立劇場シリーズ・同時代に『鳥瞰図』を脚本提供。09年、シアタートラムネクストジェネレーションvol1、続いて三鷹市芸術文化センターネクストセレクション10thに参加。文字通り新進の劇作家である。また俳優としても多方面で活動、新国立劇場では『マッチ売りの少女』、『世阿弥』、『マテリアル・ママ』に出演のほか、岩松了作・演出『傘とサンダル』『アイスクリームマン』に出演している。



松本 祐子

Matsumoto Yuko

※ P10 を参照